

台湾茶の歴史を訪ねる 第二十二回

# 魚池で紅茶作りに投資した最初の日本人 持木壮造と渡辺傳右衛門



須賀 努 (コラムニスト／茶旅人)

既にこの連載の第1、2回で取り上げた台湾紅茶の歴史。更に調べを進めていくと、日本統治時代後期、アッサム種という紅茶に適した品種を使った茶作りに様々な人々が投資していたことが分かってきた。その多くは国策、または大企業による資本投下だったが、試験場紅茶支所が作られた南投県魚池には、比較的早く個人の茶業者が登場していた。

今回は1935年以前に魚池で紅茶作りを始めたと言われている2人の日本人を取り上げたい。この渡辺・持木両氏については、今ではほぼ知られていない存在となっているが、魚池の高齢茶業者の中には、彼らを懐かしむ人々がいる。試験場紅茶支所最後の所長、新井耕吉郎氏と並んでもう少し顕彰されるべきと考え、調べがついた範囲内でお伝えすることとした。

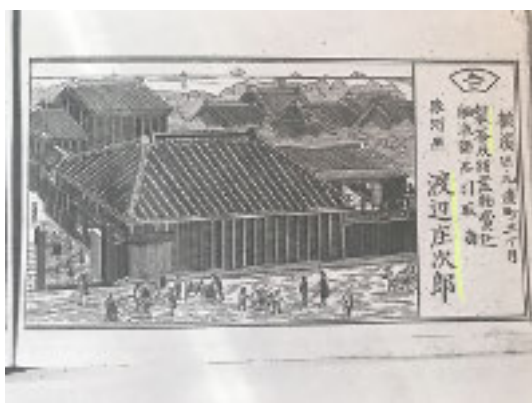
## 渡辺傳右衛門について

渡辺傳右衛門の経歴に関する資料は少なく、その多くは謎に包まれたままである。横浜市誌によれば、1879年静岡県静岡市に生まれ、2歳の時横浜に移り住んだという。祖父の傳右衛門は江戸末期横浜開港と同時に茶の輸出に携わったと言わ

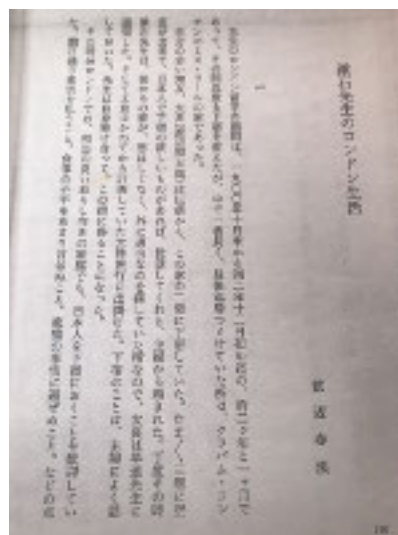
れ、父の渡辺庄次郎の代になり、駿河屋という大きな茶商を営んでいたと書かれている（若き日の傳右衛門の住所も庄次郎方となっている）。

1899年横浜商業学校卒業後、1900年にはロンドンにも留学しているから、まさに当時のエリートであった。ロンドン留学資金は大茶商渡辺庄次郎や茶業界から出ていたであろう。この留学は横浜茶業組合特派員として、世界の茶市況を知らせる役目も持っていたことからそれは分かる。

更にロンドンではあの夏目漱石と往来があったというから驚きだ。『ロンドンの夏目漱石』（出口保夫著）の中には、傳右衛門がロンドンにあったY校グループ（横浜商業出身者）の一員として、また俳人（渡辺春溪）として登場するから面白い。傳右衛門は漱石の下宿を訪ね、お茶に誘われている。また漱石が選者を務めた句会にも参加している。これまでロンドン時代の漱石は日本人との付き合いは殆どなかった、と聞いていたので、これは驚きであり、その中に茶業関係者の傳右衛門がいた、というのは、特に煎茶に深い造詣があった



横浜 渡辺庄次郎の駿河屋



漱石先生のロンドン生活

と見られる漱石とどういう因縁があったのか、もう少し調べてみたいところだ。

因みにこの句会に参加したのは、Y校グループのメンバー。傳右衛門の他、後に渡辺銀行を創設し、神奈川最初の図書館を作るのにも参画した渡辺和太郎などがおり、彼らは既に商社の駐在員のような仕事をしながら、句会や芝居見物など文化・芸術活動を好んでしていたらしい。この辺りがまさに漱石との接点であると思われるが、傳右衛門からすれば、多彩な顔ぶれと知り合うことは後に大いに役立ったに違いない。

ロンドン留学後ニューヨークに移り、合計4年に渡って、欧米における日本緑茶輸出について調査・報告をしていたが、この時点で緑茶よりむしろ紅茶の将来性に気が付いたのではないかとみられる。1910年ロンドンで開催された日英博覧会では喫茶店運営を担当する。ここで福岡産の紅茶少量に外国産の紅茶をブレンドして提供して、好評だったらしい。翌年横浜に茶貿易の会社を設立し、緑茶ではなく紅茶輸出を目論み始めた。

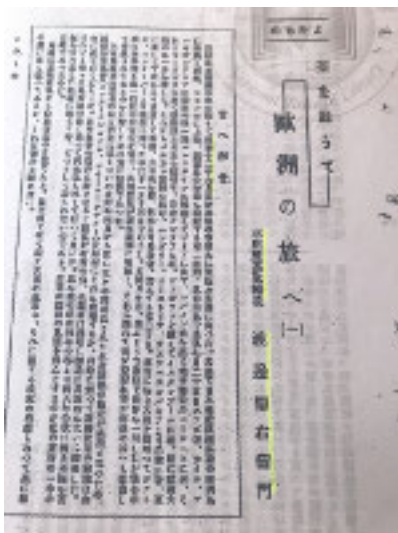
その彼が目をつけたのが台湾紅茶。当時設立されていた日本台湾茶株式会社の紅茶海外販売を担当することとなる。この会社は以前書いたように、製茶試験場初代場長、藤江勝太郎が作ったが、既

に藤江の姿はなく、製茶担当の最長老は熊本の可徳乾三で、彼の作った紅茶は海外でも高い評価を得ていた、と書き残している。渡辺はイギリスのトワイニングと紅茶販売で提携しようとしていたとの話もあった。

1925年総督府殖産局がアッサム種（アッサム州で選抜した優良品種）を導入（実際は三井からの分譲だったか？）、渡辺と持木に協力依頼があり、魚池に茶樹を植え（渡辺は新竹にも茶工場を持っていたらしい）、試験的な紅茶製造が開始される。翌年開かれた新竹産業共進会に紅茶を出品し、一等金杯を受賞するなど早くも成果を出している。だがその後世界恐慌など景気後退もあり、魚池の試験栽培は困難を極めた。その中で渡辺から茶樹を分け与えられた魚池の台湾人たちが、茶樹を育てていったとも聞く。

1932年に台湾に拠点を定め、本格的に製茶業に入っていく。1936年三庄製茶株式会社を設立して、取締役就任。三庄の株主は渡辺の他、あの高橋是清の長男高橋是賢の三共製茶と、塩水港製糖社長榎哲の大正製茶。紅茶産業には相当の資本が必要であり、大物が台湾紅茶に投資していたことがよく分かる。因みに1936年といえば、あの二・二六事件で高橋是清が命を落とした年だが、息子はどのような思いであっただろうか。

1936年は魚池に製茶試験場紅茶支所が設立された年でもあった。この支所から見下ろせる辺りに渡辺農場は広がっていたといい、約40ヘクタールあったという。当時父親が渡辺農場の整備を行い渡辺と親交があったという王如昌（茶業伝習所光復後第5期生、現在92歳）には『渡辺さんの奥さんは優しい人で、良くお菓子をくれた』という子供らしい思い出があった。当時の地元民と日本人の交流を物語っているようで何とも微笑ましい。



欧州の旅について



魚池試験場から渡辺農園跡を眺める

1937年には茶業視察で、ベルリンやパリ、ニューヨークなどを6か月かけて回っているが、この時点で台湾紅茶にかなりの手ごたえをつかんでいたようだ。またこの年、台湾茶商組合の評議員にも名を連ね、茶業者としても認められている。1938年渡辺農場の資料を見ると、従業員は1000人を超えているから、当時の魚池では一大産業ではないだろうか。そして台湾茶品評会にも台中から唯一参加している。

1940年の資料で農場は2つの土地に分かれており、合計約150ヘクタールを有していた。しかし彼を待っていたのは輝かしい未来ではなく、戦争であった。1945年の資料では渡辺農場は3-40ヘクタールとなっており、殆どが芋畑などの食料生産に変わり、結局茶作りは出来ずに終戦を迎え、1948年に帰国したらしい。

因みに渡辺は前述の通り俳人渡辺春溪と名乗り、魚池茶歌を詠んでいる。彼は単なる金儲け目的のビジネスマンではなく、文化的な側面も持ち合わせた、いわゆる往年の紳士だったのではないか。渡辺が戦後どうしたのか、その子孫はどうなったのかについては、今回の調査段階では分からず仕舞いだ。今後更に調べを進めて、もう一段の解明ができるように努力してみたい。

## 持木壮造について



持木壮造（吉村斉氏提供）

渡辺と同時期に魚池に茶樹を植え、紅茶を作り始めたもう一人が、1873年熊本生まれの持木壮造だった。持木は台湾が日本統治下になってすぐに渡台し、総督府兵站部で働き、台南や高雄を転々と勤務した後、台中に拠点を構えている。1898年頃農商務省の役人の砂糖調査に同行、その現状を隈なく見て歩く。これが後の製糖業に結び付いたのだろう。

台中にて持木商会を立ち上げ、物品の委託販売業、運送業などを手掛けていたが、1919年台中製糖株式会社が設立され、持木は10人の発起人（全て鈴木商店関連）の一人、そして常務取締役に就任する。これはそれ以前に持木拓殖組合が経営していた製糖会社を継承するものだったが、わずか1年で東洋製糖に合併されている。また同時期に朝日製糖拓殖なる会社の発起人にも名を連ねているが、収益が上がらず売却された。

同年には火薬の販売にも乗り出している。火薬取り扱いなどの認可が簡単に取れるとも思われず、これらは鈴木商店（台湾とゆかりが深い大財閥だが1927年破綻）の支援を受けることで成り立っていたようだ。他にも1923年台湾炭業の社

長となり、また台湾鉄工所（台湾の有力製糖会社によって設立）の監査役（1941年までこの役職に留まっている）も務めているが、これらは鈴木商店系列の会社であった。

持木が台湾で事業を拡大できたのは、鈴木商店との深い繋がりによるのはほぼ間違いない。鈴木商店との関係は、『鈴木商店と台湾』（齋藤尚文著）によれば、『土地買収、事業拡大の過程で鈴木商店の後援を得るようになった』とあるが、その具体的な内容はよく分からない。

1917年には南投（草鞋墩一埔里）での軽便鉄道事業参入を目論み、政府に申請書を提出している。1919年の新聞に『帝国製糖持木一派と辜顕栄一派が争っている』とこの案件が報じられているが、辜顕栄とは台湾五大財閥の一つ鹿港辜家の出で、1895年日本軍が台湾に上陸した際、台北の門を開けた人物として知られる有力者。既にこのような人々と事業を争うほどの力が持木にあったということだろうか。

1925年総督府殖産局がアッサム種を導入した際には、渡辺と並んで持木にも声が掛かり、魚池鹿嵩に茶樹を植え、試作に入っている。この土地は元々、鈴木商店の幹部だった平高寅太郎が、別の用途で総督府より払い下げを受けたが、その事業に躓き、1921年に持木が引き取ったものだった。そこに茶と杉を植え、杉の造林は順調であったという。

1934年頃総督府は魚池地区でアッサム種紅茶を製造する日本人を積極的に支援し始め、持木もそれに応じて投資を行い、1936年には鹿嵩茶廠を設立する。また翌年には個人事業を合資会社に転換、魚池の事業は長男持木亨が主導し、次男茂は台北で財務を担当した。壮造自身は台北の『川端御殿』とも呼ばれた広大な日本庭園を持つ瀟洒な家で悠々自適な生活を送るようになる。持木興業の持ち分は長男亨と次男茂が20%ずつ、壮造は10%、その他は一族の者が持っているが、林

業などを手伝っていた雇用人、寥阿霖にも10%の持ち分があった。



持木壮造と谷村愛之助（試験場場長）（吉村斉氏提供）



台北 持木家邸宅（川端御殿）（吉村斉氏提供）

因みに1928年に創立された台北帝国大学で紅茶研究を行っていた山本亮教授は『紅茶製造に就いては毎年夏休みを利用して約十日間位の日程で魚池の持木さんの工場を借りて、萎凋、発酵等の研究を行った』と回顧している。この山本教授が1936年に中国安徽省から持ち帰った祁門種を試験場が長年保存、品種改良して、2019年に新品種台茶23号として発表された。台湾が今でも日本時代を受け継ぎ、新しい紅茶の製造に取り込んでいるのは、何とも感慨深い。

持木紅茶の高い品質を認めたのは森永食品だった。この事業が有望だと見た森永から1936年頃提携話があり、ほぼ全ての茶葉を森永に提供するようになり、日本国内で販売された森永紅茶、キャ

ラメル原料に使われたという。尚森永と提携(借入金を森永が肩代わり?)したことについて、持木は新聞記者に『依然として茶園経営は持木が行っている』と発言している。持木自身、この事業が人生の集大成と位置付けていたとも言われており、息子たちと共に最後の事業に取り組んでいたようだ。

因みに森永の資料によれば、持木農場は従来のアッサム種の他、別途スリランカから『セイロン種』と呼んだ品種を持ち込み、ここに品質の特徴があった(セイロン種の輸出をスリランカ政府が禁止したことから希少価値)。これらの茶葉を森永が買い取り、日本国内でブレンドして森永紅茶は作られていたという。

1940年持木農場の広さは300ヘクタールを超えており、中村農場に次ぐ、魚池第2位の地位を占めていた。尚中村農場とは、茶業組合中央会議所会長も務めていた、静岡の、いや日本茶業界の大物、中村圓一郎らが投資者となって作られた茶園。中村らは長年静岡で紅茶製造に携わっていたが、国策の流れの中で魚池での生産も始めたものと思われる。

しかし戦争が始まると紅茶の輸出が出来ず生産はストップ。食糧難などから茶畑を潰して芋や野菜を作るようになり茶園は荒れ果てた。1945年でも農園は200ヘクタールあったと言われているが、これは茶ではなく、食糧生産が盛んだったことを示している。

1938年頃持木農場に入社した劉慶芳(1924年生まれ、現在埔里在住)は『最初は茶作りをしていたが、持木さんに気に入られて1年間宮崎の試験場に研修に行かせてもらった。そこで育種などの勉強をして戻ったが既に茶業はストップしており、仕事がないので高雄の海軍に行き終戦まで兵隊だったよ』とちょっと声を曇らせながら語ってくれた。



持木農場で働いた劉慶芳氏と

因みに劉が研修したのは、1928年に開設された宮崎県農業試験場川南分場だと思われ、劉が覚えている堀地重義所長は、アッサム種より更に紅茶に合う品種の改良を行うことを目指していたらしい。尚劉の証言でも、持木壯造は台北に住んでおり、魚池には長男の亨が常駐していたという。

光復後持木家が日本へ引き上げる際は、地元民が総出で見送り、そして劉も含めて皆が涙を流して別れを惜しんだという。持木(恐らく亨)が『土地などの資産を地元の人に引き継ぎたい』と言っていたとの話もあり、そのあたりが現地の人に好かれていたのだろうか。因みに持木壯造自身は、終戦の前年に台北で亡くなっており、その遺骨は紆余曲折の末、故郷熊本に埋葬されていると聞く。

光復後台湾省茶業会社が持木農場を接管して、その後台湾農林魚池分場持木茶廠となった。ここには新井耕吉郎技師らが仁愛郷で発見して植えていた山茶が大いに繁殖し、分場の苗場として認定されたという。ここで3代目の工場長を務めたのが、前述の劉慶芳だった。

更にそれを引き継いだのが、和果森林の石朝幸(現在92歳)。彼は光復後第3期の茶業伝習所卒業生であり、地元の茶業に従事するため、持木茶

廠に勤務したという。だが1950年代、台湾農林が魚池に新しい茶廠を建設すると、持木茶廠は廃止されてしまい、残っていた工場の建物も1999年の大震災ですっかり無くなってしまったと残念そうに話す。



魚池 持木茶廠（吉村斉氏提供）

最後に戦後に持木家と森永紅茶について僅かに触れたい。壮造の長男亨が台湾から引き揚げて定住した先は、壮造の故郷熊本ではなく高知県だった。台湾時代から提携していた森永は戦後国内で森永紅茶製造に着手、山茶の豊富な高知での事業を画策し、1955年高知県紅茶会社を設立した。その際社長となり、以降15年間高知紅茶に熱心

に取り組んだのが亨であった。因みに持木を高知に誘ったのは宮崎試験場所長だったあの堀地だったというから、茶のご縁とは何とも奥深い。

今では高知県内ですら、森永紅茶を知る人は殆どなく、歴史の中に完全に埋もれてしまったが、この旅の最後に持木壮造の末裔の方々を高知に訪ね、そして森永提携紅茶工場の最後の1つを探し当てられたのは、壮造と亨の強い導きがあったように思えてならない。台湾で花開いた紅茶産業は、戦後日本に受け継がれたが、それも1971年の紅茶自由化で幕を閉じ、持木家の挑戦も終わりを告げた。



高知 森永紅茶の原料工場跡